

白氏文集 二十七 黑潭龍

加藤 淳平

深き淵の「九重の」底に潜む龍に名を假り、供へ物の肉と酒を飽食・飽飲する狐と鼠は貪吏にして、何も知らざる龍は天子、豚は人民なれば、諷刺は痛烈を極む。

黑潭龍 疾貪吏也 黑潭の龍 貪吏を疾む也

黑潭水深色如墨 黑潭水深く 色墨の如し

傳有神龍人不識 神龍有り^りと傳ふるも 人識らず

潭上架屋官立祠 潭上に屋を架して 官 祠を立つ

龍不能神人神之 龍は神なる能はず 人之を神にす

豐凶水旱與疾疫 豐凶 水旱と疾疫と

鄉里皆云龍所爲 鄉里皆云ふ 龍の爲す所と

家家養豚漉清酒 家家豚を養ひ 清酒を漉す

朝祈暮賽依巫口 朝に祈り 暮べに賽するは 巫の口に依る

神之來兮風飄飄 神の來たるや 風飄飄たり

紙錢動兮錦傘搖 紙錢動きて 錦傘搖る

神之去兮風亦靜 神の去るや 風亦靜かなり

香火滅兮杯盤冷 香火滅し 杯盤冷やかなり

肉堆潭岸石 肉は堆し^{うづたか} 潭岸の石

酒潑廟前草 酒は潑ぐ^{ちりそそ} 廟前の草

不知龍神饗幾多 知らず 龍神の饗くる 幾多なりや

林鼠山狐長醉飽 林鼠 山狐 長く酔飽す

狐何幸 豚何辜 狐何ぞ幸なる 豚何ぞ辜なる

年年殺豚將餒狐 年年豚を殺して 將^もつて狐を餓^{やしな}ふ

狐假龍神食豚盡 狐 龍神を假りて 豚を食らひ盡す

九重泉底龍知無 九重の泉底に 龍知るや

(大意) 黑潭と云はれる淵は深く、水の色は墨のやうに黒い。神龍が棲むと傳へられるけれども、誰も本當のことを知らない。淵の上に小屋を架け渡し、官が祠を建てた。龍は自ら神になることはできず、人が神にするのである。豊作と凶作、水害と旱害、病氣や傳染病など、村人たちは皆、龍が決める。と云ふ。村の家々では豚を飼ひ、清酒を漉す。朝に祈り夕方に賽錢を納めるのは、巫女の口次第である。巫女が祈り、神が來ると風が飄飄と吹き、供へた紙の錢が動いて、錦の傘が揺れる。神が行つてしまふと風は亦靜かになり、線香の火が消えてお供への杯盤が冷たくなる。淵の岸の石の上には肉がうづたかく供へられ、廟の前の草の上には酒が散り注がれる。かうしたお供へのうちのどれだけが龍神のお口に入るか分らないが、林の鼠や山の狐は、長く飽きるほど酔ふ。狐は何と幸福なのだらう。豚は何と

罪深いのだらう。毎年豚は殺されて狐を養ってゐるのだから。狐は龍神の姿を假りて、豚を食ひ盡す。「九重の」地下深い所の龍神は、そのことをご存じなのだらうか。

(平成二十九年十二月三十日受附)